

海蝶息音

雑詠日記

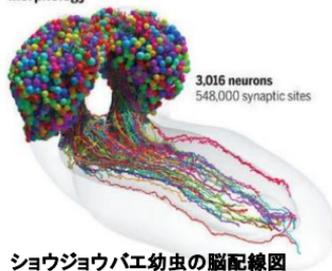
卷の九

二〇二三年

谷川修



Morphology



ショウジョウバエ幼虫の脳配線図

二〇二三年も暮れようとするときボルヘスの最後の短編集の一つ『一九八三年八月二十五日』を読んだ。夢の中でのように、六十一歳の作者が死にかけている八十四歳の自分と対面して言葉を交わす筋立て。——「これから先残された月日について、なにか私に教えてくれることはないかね？」 「何が教えられるというのかね。ボルヘス？ 気の毒だが、すでに馴染みの不幸がふたたびくり返されるだろう……」 「間もなく死ぬというが、ほんとうにたしかかね？」 「たしかだ」と彼は答えた。「穏やかな安らぎのようなものを私の心は感じている。今までなかったことだ。君にこれを伝えることはできない……」。

これまで夢は多くの人によって語られてきたが、すぐれた作家は、自分の死とむすびつけてこんなふうな短編を物した。さてわたしは、八十四歳にだいぶ近づいているが、まだ自分の死に目をこのようにイメージに表わして考えたことがない。これほど淡々と迎えることができるだろうか。

往く年や牛飼い童老いて今日

一月二日
年初め鱒釣る縄引く小舟

一月五日
年頭に親友と会う念入りに整頓された書齋の机

利き手が思うままにならなくなった友からは新年の電話。

町に出てモールでランチしみじみとこの平穩の貴重さ悟る

一月九日
一年の計点検に来る小鳥
(すぐかたわらにジョービタキ)

一月十一日
空高く鳶飛び瓦に霜の朝
(西空に水月、快晴)

松明けて西条柿の抜けぬ渋

ふたつき
二月であざやかな朱色になったが園丁同様まだ未熟。今日は菜菔梅剪定。

一月十九日
老いて読む『苦海浄土』に心こゝろさわぐ、生きるうむねごめきこそがたましい

この世界で身をもってまわりにある人と生き物と自然とかかわり合って

生きることのほかに、隠された意味を求めてもない、とあらためて思う。
石牟礼道子の生身を文字にしたこの文学作品を読むこと、遅きに失した。

一月二十日

二時を指し止まった時計朝陽浴び再び始動わたしも蘇生

太陽電池で動き蛍光塗料を塗った針をもつ時計が朝の光でよみがえった。

鵜の渡る海は大寒日の出射す

(思わず手を合わす)

一月二十四日

当地では右往左往の吹雪の日

(皮膚科受診、一週間で四つの医院へ)

一つ一つ老いの事象が身に起きる齒をかみしめて宙を見つめる

一月二十五日

小庭に積もる雪見るわたくしも目にする木々もメタモルフォーゼ?

E・コッチャ著『メタモルフォーゼの哲学』、不可解な散文象徴詩。

一月二十六日

道草には辛い寒中釣る亭主

(家内の小言がしゃくだから出て来た、と)

一月二十八日

薄氷踏んで散歩に出る翁

掌を擦って綿雪の降る湾と在る

二月七日

吾が妻が『妻の終活』読めと言う何もできない夫と知れど

二月九日

雨のせい小鳥のせいか椿が揺れる

「自らの加担がないか」、関係を結ぶ人の世加担必定

斎藤幸平著『ぼくはウーバーで捻挫し、…、水俣で泣いた』を読んでい
る。日本の未来はこういう若い人たちの活動力にかかっている、と思う。

二月十二日

来客がハイハイをする春日向

(少子高齢集落で国の宝をもてなす)

二月十三日

軍拡や大学破壊、諸悪手で衆愚政権また亡国の道

二月十五日

この冬の最後の時化に乱舞する二羽の沙鷗は良き明日願う

二月二十一日

三寒の信書空から二三片

二月二十二日

過去知らず軍事同盟強化して戦へ向かう轍わだちをたどる

二月二十五日

老いた身の鼠径に腸が頭出す生命の怪このわたくしに

昨日風呂に入つて鼠経ヘルニアらしいふくらみに気づいた。前立腺を摘出した者に多いという。人工尿道括約筋に付属する水圧調整のシリコンの管が埋め込まれているので、簡単な手術ではすまないかもしれない。

陽と小雨が注ぎ育てる露の臺

二月二十六日

四温の日梅咲く道を病院へ

二月二十八日

この世でも死者の裁判するという

(名誉回復のための再審)

三月二日

カレンダーに書きこみ増えて春始動

(白い水仙を手折る)

立命に遠い老夫が頼りなく心を安め山見て歩む

三月四日

カヤツクが春へ漕ぎ出し鶉は夫婦

翻案

「処生於江海」

孤舟漕出春 海鶉夫婦連

太陽寿天地 吾生在江辺

海を見る塩焼く海士の末裔よ今の暮らしに値打ちはあるか

三月六日

再生を願ひ泥土と戯れる

(三度目)

青鷺が呵呵と讚嘆月円か

(アメリカ先住民も啓蟄と呼ぶ季節)

三月七日

歯を半分切つて抜かれて一段と老いの進んだことを痛感

三月十日

土降って水平線が開かれる

海山と生き物を見て身心に作動するものそれが魂

緒方正人著『チツソは私であった』読了。この書と石牟礼道子の『苦海浄土』に出る魂という言葉は同じ響きをもつ。水俣のある不知火海周辺ではかつてこの言葉が生きて使われていたことが判る。二人の作品で、魂という言葉は超越しかけてなおこの世界にとどまっているように思われる。

三月十四日

頬撫でる風に花々唱和する

三月十七日

船出待つ水高生の船に春

三月十九日

高校の大文化祭青春の身心躍る春はたけなわ

もう一つプラスバンドの弾む音ホールに響き花々開く

三月二十五日

誕生日再生期して入院し春の夕べに独り黙想

三月二十六日

木々見ええず思いめぐらす花曇り

楽聖のピアノソナタに身を任す

三月二十七日

三度目の覚醒果たし舞い戻るこの世の生をまた試みる

名乗りには「三度目覚めた人」と言う、電話相手の名は「不空居士」

三月二十八日

五分粥の味かみしめて町を観る

W・モリスの『小さな芸術』読了。モリスは、人が外界を認識しながら生きて感じる美と喜びを「芸術」と呼ぶ。別の人は、このとき人に作動しているものを「魂」と呼ぶ。

三月二十九日

長らえてまた花に会うこの冥利

細胞が組織修復わたくしという生き物のしぶとい命

三月三十日

野グミの実摘み取る人に土が降る

立ち止まり映画「LIVING」観る日得る

朝刊のインタヴュー記事に、黒澤明監督・志村喬主演の映画「生きる」を、カズオ・イシグロが英国のドラマとして脚色しなおしたイギリス映画が紹介されていた。ちょうど上映中と知って娘と観に行った。黒沢明が映画を製作するときに描いた絵コンテをテレビの番組で見たことがあるが、黒沢には映像イメージがはっきりと見えていたと思われる。とりわけ映画「生きる」は、そのプロットの巧みさが際立っている。翻案「Living」は、原作の秀逸さをよく再現している。若いころに観たその作品の再生を思い立ったイシグロも、ノーベル文学賞授与の理由に挙げられた小説「日の名残り」を読むと、物語の構想や形式に巧みな人だと判る。映画作家黒沢と小説家イシグロは共通する方法の持ち主だ、と思う。さらに感じるのは、日本人の両親のもとで育った二人が文化的につながるといっただけでなく、この物語が日本とイギリス両方の文化に親和的だと思えることである。両国の社会と人には、大陸ヨーロッパの他の国々よりも多くの共通する特質があるように感じる。

この映画のメッセージに誘われ、死期の近いことを宣告された中江兆民が『一年有半』に、「人は、一生のうちに一度や二度は発奮してなにがしかのことを為す」というようなことを書いていたことを、ふと思いついた。

三月三十一日

萌える春河口に凪いで鴨憩う

敷石の歩道に砂が吹きだして蟻の生活世界に示す

四月一日

わたくしは花鳥海山日月と風情を詠う時めぐる中

四月四日

小日本菜の花と麦育つ土地「ふるさと市」へぜひおいでませ

四月五日

救われた三信病院あとにして人に信置く道に踏み出す

四月十日

麦活けて日並みのくらしまた開始

四月十三日

悪政府空襲警報故意発令

北朝鮮と敵対・停戦中の韓国が、北から日本海にむけてミサイル発射と報じているだけに、日本政府は空襲警報を出して、テレビやラジオで、国民に地下や頑丈な建物の中に避難するようくりかえし指示した。米国に従属しての米日軍事同盟（同志国とあいまいな言ひ換え）の主要な仮想敵国は北朝鮮ではなく中国である。最近、米国の指令のままに日本は戦争体制をつくる途に踏み出している。警報は、世論をこの方向へ誘導するためのプロパガンダであり、予備的訓練でもある。台湾に近い西南諸島に軍事力の展開を始めたおりしも、訓練飛行中のヘリコプターが墜落して師団長を含む十人が行方不明。この事故は戦争がもたらす現実がどのようなものになるかを予示している。

現代の世界で、きわめて狂暴な国家でも、そこまで緊迫した対立関係にない他国にいきなりミサイルを撃ち込むようなことはしない。それを知っているながら政府は誇大な警報を発して国民に避難を指示する。国際政治の場で品格を欠く乱暴なやり方だ。衆愚政治が国を誤った方向へ導く。今これにはつきりと批判を加えなければ、将来本物の空襲警報を聞くことになり、十人とは桁ちがいの人の命が失われることになるだろう。「攻撃能力」を強化し「国民の命と財産を守る」という政権の言い草は詭弁である。戦争は狼とはちがう。

四月十五日

頽廢し君子の国に賭博場

賭博場はリゾートにふさわしいか。外国の胴元が利益を海外に持ち出す。

四月十八日

ツバクラメ寓居を探し風歌う

(浦の苦屋に燕尾服来訪、選に漏れた)

四月二十一日

大坊主まどろみ萌える山と伏す

四月二十二日

春寒に炎揺るがず寺の燭

(一族の葬式後カイガラ虫を殺す、数百匹)

四月二十三日

打ち上げた潮を春陽が塩と成す

四月二十七日

逝く人は『哲学講義』携えて花々を着て彼岸をめざす

四月三十日

風招く浦に来て鳴くホトトギス

五月二日

隼よ、五月の風のように、精神は伸びやかで身体は健全であるか
優よ、五月の風のように、身心が爽やかで楽しい音楽を奏でているか
おじいさんも、そのようであるだろう君たちにあやかりたいものだ

五月三日 狂歌

人間は人を愚かにする道具競ってつくるすでに大馬鹿

(人工知能?)

Never call only automatic instruments intelligent!
 Never tell as an automatic speaker, if you have intelligence!

五月四日

テッセンの紫バラと競い合う

耕作放棄地に植えた枇杷の新芽が食われていた。少し高い枝も折れていたので鹿が来たと思われる。置き土産に小さな丸い糞と大きな糞があったから、猪も来たのだろう。野生の動物が生活圏をとりもどしつつある。

五月五日

南風波駆り立てて海渡る

五月八日

春日遊崑崙山 荒野尋求香草

(立夏を過ぎたが)

月下臥白水岸 夢中味読詩情

(『楚辞』「離騷」を読み始める)

五月十二日

廻向する鯨が絶えて風ぐ湾に遊子かすめるツバメの飛翔

山にない白濁山清月寺の坊守がウィルスに感染し恒例の鯨回向は中止。

五月十六日

台船の親玉二隻湾圧し棧橋築く杭打つ準備

無神論封じやむなく礼二拍

(役目を負う集落に寄与する企業の起工式)

開式・修祓・降神之儀・献饌・祝詞奏上・清祓・穿初之儀・玉串奉奠・

撤饌・昇神之儀・閉式・神酒拝戴。宗教の中心には儀礼だけがあるのだ。

長く伸ばしたことばにならないかすかな母音の響くなか霊神が降り昇る。

霊神は巫覡へ憑依し、祝詞が濁音のないゆるやかな古語で語られる。

五月十七日

歳神が金鶏菊に代を貸す

(穀物神の上陸した岸に海の東から来た草花)

まだ弥生アサギマダラが汗する日

五月二十一日

鏡成す卯月の海にしばし打坐

五月二十四日

風車風かざぐるまを称える、麦熟れる

学識は無知識るためとクザーヌス知性卓越ただ眼を見張る

しかし、絶対的最大の者とそこから展開される理論に同意できない。

五月二十五日

パン口に園丁破顔グミのジャム

五月三十一日

梅雨晴れ間切り裂く戦闘訓練機

(北朝鮮のロケット実験に空襲警報)

核分裂発電廃棄した国に敬意を払う、戦争準備するこの国で

六月三日

紫陽花が赤い花台に天気よし

六月九日

エルニーニョ発生、園丁脅かす

六月十二日

工場で育つパプリカ人の世と地球を乱す恐れはないか

六月十六日

孫へ送るスモモは二つ不作園

初春に寒く虫たちも少なく園丁の未熟のせいで、枇杷・桃・杏・梨も
実らず、林檎はわずか。茱萸・無花果・葡萄・柿・柑橘だけが順調。

六月十八日

石灰で八朔蘇生実りなさい

(緑の玉五つ)

肝冷やす葡萄の下に赤い蛇

(三十 cm 余り)

六月二十二日

猿も出てイチジクを食う浦に住む

同じ浦に住む同窓が退院したのを同窓の友と訪問。猿が来るといふ。

六月二十三日

墓守の日本ミツバチ退治する

累代墓に数年分八層の巣と蜜があつたという。むごいことをした。

六月二十六日

石室に首入れ浄化試みる山桃落ちる山中の墓

業者に蜜蜂の死骸と巣のかげらや蜜が骨壺にかかっているとされたので、モップを取り寄せ今日掃除をしようとしたが、骨壺を入れる室はすぼめた肩がやつと通るぐらいしか開いていない。モップは役に立たず、頭を突っ込んで手でかきとるしかなかつた。いくつかの骨壺を引き上げて死骸やごみをあらかた取り除いたが、十分にはできなかった。底はコンクリートで塗りこめられておらず、小さな木の根が入りこんでいる。父と母の骨壺は

上等の釉薬のかかったものだが、あと八個は茶色で他の用途の鉢とあまり違いはない。もう一つ白い小さな壺があり、骨がわずかに入っていた。父と母の分骨は慣習どおり別に納めたので、誰の骨か定かでない。父母以外は各人に墓石を立てた時代に亡くなっているから、(わたしに近しい人の遺骨だと考えられるが)八つの壺の遺骨がいつころどのような経緯で納められたのかわからない。父の死後累代墓以外の墓は掘り起こして骨を回収したのだが、今回、その時掘り出した骨がビニール袋にまとめて入れられたままだったことに気づいた。全体をコンクリートで覆い、掘り起こした墓の石も並べて残したのはよかったが、累代墓のつくりが蜂の侵入まで考慮してなかったのでこういう事態になった。わたしの対処が足りなかったせいでもある。ともかく、生きているうちにその石室に首を入れて、先祖の骨に対面することができた。人が生きていた証しの骨は石室に守られていれば風化は遅いにしても、土やカビにまみれることを目の当たりに知る機会を得た。

六月二十六日 反乱が強権国家衰微する契機はらむと明らかにする

六月二十八日 年半ば老夫の業も道半ば (雨天、蓮花半ば開く)

六月三十日 変性した磁針一新進路指す (冬休みに強い磁石で狂ったのを買換えた)

七月一日 大雨を引き受け海は微動せず

七月五日 陽が照らす母にゆかりの青蓮花

十四世紀僧澄円が中国廬山から種を持ち帰った蓮（ほのかに緑色を帯びる廬山白の種）。十九世紀初期大日比三師の西円寺にもたらされた。今日、開花を待つ蕾に気づく。もらった年に咲いてから五年待った。

七月八日 曇天を若い漕ぎ手の声就打つ
(元同級生死去)

七月十五日 我が思索電連網に送り出し蓮の実みのる時にまかせる

無謀にも電子書籍『科学的認識論の構成と正法眼蔵批判』を出品。

七月二十日 十文字まどい直進この旅で日常離れ心遊ばせ

那須岳にガクアジサイが咲く大暑

七月二十一日 樺の坂清水が走る奥会津

尾瀬沼へアナグマ轢いてシャトルバス

(域内動植物搬入出禁止)

七月二十二日

水連がひっそりと咲く五色沼

(桃の樹下桃食い駄句の旅終える)

七月二十六日

衰えるくくに似合いの遠花火

コロナ禍前の三千発が七十五発に。この市と県の人口減少率は高い。

七月三十一日

人神興喚声あげる夏の浜

今年一番の暑さとなった今日、集落で神興を巡回する「おみうけ」の行事。「み」は神興の「神」を意味するのか。希望する家の門で神興を回し、神主が祝詞をあげる。小さな大歳社のある「堂のしろ」では神興を海に入れてゆすり持ち上げた。大津郡東部で海に入るのはここだけ。

八月二日

幽冥の森でふれあい語る竹

不在にするので墓掃除。熊が出たという山から遠くないこの緑陰にクマ蟬ではなくミンミン蟬。わたしよりも若い近い親族の訃報。

八月四日 白骨は熱く楓がもう赤い

八月八日 漫然と事無きように秋が立つ危機ほのめかしたカゲが走る

八月十一日 祖父が送るスタンプ孫に吉を呼ぶ
(高校総体孫の登山チーム準優勝)

八月十三日 すりおろす日照で硬い夏大根

八月二十一日 芙蓉花優美を生きる今日一日ひとひ

カマキリが網戸で揺れて暑氣払う

八月二十三日 キウイさえ暑さに萎えるやつと処暑
(園丁も夏バテ)

八月二十八日 今少し暑さに耐えよ果樹たちと老園丁が励まし交わす

八月三十日 絡みつく蔦刈り払う定め知りただ黙々と汗して払う

九月二日 百年で最も熱い夏だったグラフが示す地球の異変

九月五日 海風が唸ってやつと初嵐 (はぐれ鵜は海面かすめ何急ぐ)

九月九日 砲五門行き交う船を狙う瀬戸 (傍では義経と弁慶が踊っている)

鳥居立つ天皇様へカメラマン (宮内庁管理安徳天皇陵墓参考地)

準急バス分水嶺の古道越え (先日の台風の中で山陰線・美祢線不通)

九月十二日 大人の風格の人散歩する中秋の気が思索に誘う

九月十四日 秋雨に右手失い赤手蟹

九月十七日 大輪の夕顔が立つ浦の背戸

九月二十二日 里芋の黄色い花が咲く便りようやく暑気が去っていく里

九月二十七日 遅咲きの百日紅に時を見る

九月二十八日 強い陽を二重ふたえの芙蓉享受する (ほかのは一重なのに)

九月二十九日 名月に孫が団子を作ったと、便りに笑顔ほんに真円

十月一日 横縞の虫這い急ぐ道は秋 (アゲハの類か、大きかった)

白萩が紅を装おう一二片

十月四日 風に揺れ蜘蛛がバツタを抱きしめる

十月五日 北風に鳶凧となり空に在る

十月七日 くちなわが食餌を探し老ける秋

一九八五年の「戦闘的なユマニスム」という大江健三郎の文章を読んだ。考え深くて力強い文章に感銘を受けた。悲しいことに、これは現在の情況を撃つのも有効だ。

十月八日

対岸にいくつも草を焼く煙 遷る気を見る智者 鴻おわとりよ

戦場がまたひとつ増え人が死ぬ

(白濁山永代供養法話無に帰す)

ハマスは同胞が死ぬことが判っているのに敵地にロケット砲を撃ち込んだ。絶望したテロリズム。スターリンの末裔プーチンにはかつての領土をとり返すことに比べれば人の命は軽い。非情な国家主義。近代テロリズムはロシアの政治風土から生まれた。

十月十一日

細君の同窓会にお供して児島へ。列車で丸亀まで足を延ばし岡山に宿す。

書物置き明珠を探す旅に出る

乗りこんだ Hello Kitty のにぎやかな客車が心浮き立たせるよ

駅名を復習しつつ上る旅げにこの国は山がちな土地

海渡る鉄路から見る島々は秋の陽受けてのどやかにある

丸亀城の急な坂を上りながらしくじりに気づいた。タクシーの女性運転手に知ったかぶりに、黄門さんと兄が息子の相続する家督を交換して、光圀公の息子がここの城主になったと話したら、彼女が面白い話ですわと言ったが、それは高松の方だった。旅は人を不注意にする。後の祭り。

後樂を得て木々を見る雲と水

秋入日烏城輝きカラス鳴く

細君を一人で天守閣に登らせ、こちらは下で待った。鯨と四隅の飾り瓦と軒瓦の先端の金メッキが輝いている。道元は、世界を障壁瓦礫と表現して、自己がそれに溶け込み一体化するのを願ったが、今わたしに、小鳥たちが鳴き交わすさえずりが尽十方界の声のように響く。

十月十二日

旅なれば路面電車を楽しもう

煙立つ四国見る山海静か

見渡せば萩と大橋島と島

幾重にも島々浮かぶ瀬戸の海貴重な布置を称え感嘆

鷺羽山の三角点よりも高いピークには鐘秀峰という名がつけられている。そこは、大きな岩石群からなるとも大きな磐座である。その北側に三つの古墳があると案内図に書いてある。磐座との関係があるだろう、行ってみようと思ったのに、距離と時間を読み間違えてバス停に引き返す。しばらく時間があつた。松の木陰の岩に腰をおろして空を見上げていた。

百代の過客行く雲停まるごと

後記…帰宅後、鷺羽山の古墳のことを調べた。この岬の南端部海岸近くでは、西日本で最初に発見された旧石器時代の遺跡もあり、対岸讃岐のサヌカイト石器が出土したという(旧石器時代の基準遺跡と見なされているという)。古墳は、土師器・須恵器が出土し後期古墳時代のもので推定されている。横穴式石室をもつ円墳だったらしい。写真を見ると、尾根の見晴らしのよい場所に、鐘秀峰の磐座と同じ花崗岩を並べて石室を築いたようだ。

十月十三日

月仰ぐ種族が仰ぐ大空に自然の理法描くうろこ雲

十月十四日

星形のアケビ出現秋や好し

(性急な園丁は見逃していた)

十月十六日

患者にも検査の結果待つ時間倦むほど長い、外、秋日和

(義妹)

十月二十日

二百万パレスチナ人立ち去れと死命制して宣告される

米国大統領曰く「イスラエルの味方だ。ただ市民の被害を最小限に」と。
米国はイスラエルの侵攻を承認したのだ。ガザ市民の命を奪うことも。

十月二十一日

蝶二匹螺旋を描いて天高く

作家大佛次郎の『南方ノート・戦後日記』読了。一九四八年二月二十五日に、「遺書ともなるべきもの、いつになったら書けるのか?」、「その一本を吐き出せるかどうか」という文章がある。この深い思いが遺著『天皇の世紀』に結実したのだ。その小説ではないノンフィクション大作が『太平記』に匹敵する古典になるだろう、とわたしは思う。

十月二十三日

コスモスの咲く岸边から海原に舵手兼漕ぎ手桃源郷へ

(真人住処しんひと)

十月二十九日

釘づけられパレスチナ人殺される画像見つめる吾もその人ひと

(人同獣)

十一月三日

理不尽が子に怨恨を刻みこむ

イスラエル一片の土地重包囲事の始終をみな書き残せ

本日、日本の外相がイスラエルを訪問し、その「防衛戦」に理解を表明。

十一月七日

多忙亡心対院庭

秋光甦生石露精

恐不再来如斯好

願天機遂循環計

十一月九日

冬立って歩み乱れる浜千鳥

十一月十日 柿残し季節急変霧の道

十一月十三日 「初冬四日独居」

寒氣侵肌白浦庵

日逐時雨出雲間

槿下黄菊笑孤老

低声擬詩望彼岸

十一月十七日 老いた身でなお綱渡る尉じょうびたき鶯

高野つつじの姿勢を正す綱は桜へ。一方の花芽は大きく他方は落葉了。

十一月十八日 コスモスに心躍らす初霰

十一月十九日 ささやかな覚醒感じ陽を受けて吾が影見つめ天と地に在る

友人と『純粹理性批判』（篠田英雄訳、岩波文庫）を読み始めている。朝準備のために第二版序文を読んで、こう表現してよいだらうと思うが、感動

を感じた。カントのこの著作を基礎に置いて拙く『科学的認識論の構成』にまとめた考察が的外れではないという思いを強くした。カントの考え方を自分なりに文章に表わすことをしたあとだからだろう。

以前は序文をこれほど丁寧に読んでいなかったことに気づかされた。そこには、考え抜かれた認識理論の要点が書かれているのだ。これほど観念論に對する明確な批判が書かれているのに、未だに多くの知識人と呼ばれる人たちの書物に観念論的な文章が見うけられる。この序文を真剣に読んでいないとさえ思わせる。ただし、この批判書では、まだ古来の形而上學に對する尊敬が純化されていないと思う。「神や魂や自由や不死といった人間を閉じ込める檻をこじ開けたのはカントの力と賢さだった」と正しく受けとめたニーチェが、「カントはあとで再びそれをこっそりと再導入した」と批判した部分が『純粹理性批判』にはたしかにある、と言わざるをえない。「思弁的理性」の批判つまり「認識論」を論証したと言いつつ切っているのに、実践・道徳にかかわる「形而上學」を構想する余地があると考えている点である。しかし、この序論と本文でそういう形而上學を提示しようとする文章は、認識論の部分ほど力強くはない。実際にのちに著した『実践理性批判』で根本法則としたのは、ただ「君の意志の格律が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」とする一行の命法だけであった。行為の内容

にふれないこの純粹に形式的な定言命題はカントの認識論にさしさわりをもたらさない。だから、カントの理性理論全体の中にニーチェの言った後半の批判が当てはまるものは実質的にない、と考えてよいとわたしは思う。

十一月二十一日 陽谷ようこくから昇る朝陽あさひが額射ぬか抜く

(台所)

ツワブキに黄な海の蝶春夢見

ムベ一つむべなる命実らせる

(予期せぬ一会)

十一月二十五日 大氷山海へ温暖抗議して

十一月二十九日 破碎にも拮抗フィンのガラスの美

(萩美術館グラスアート展)

十二月二日 大船の名はW I S D O M 舵手の名は？

(ガザ爆撃再開死者二百人)

十二月六日 冬に蛾が地で舞う時節識る大地

ワカサギがまどう湖底の見えるダム

十二月八日

百歳と介護施設で面会し会話にならぬことばを交わす

十二月十日

嗚呼、世に事もなし

人間・国家の衰退を止めることを得ず
名利の人事・紅旗征戎は吾が事に非ず

十二月十三日

太鼓打つ磯の社の祭礼日垣根の櫓が冬の陽に照る

浦の漁業者が消え、参加者釣人二人。市の小学校十校に入学者百八十人。

十二月十七日

よい映画楽しみランチ外は雪

(いなかの文楽も上演できる劇場)

十二月二十日

長い影追いかけて歩む冬の朝

十二月二十一日

期待してカーテン開く、薄ら雪

山に雪、海いぶされて、風、鳴

市場とは無縁の果樹に元肥を

十二月二十二日

対岸の霞む雪中飛ぶ海鵜

(夫婦鵜と行脚の老園丁の用事は何か、冬至)

十二月二十三日

戦争を放棄した国、人殺す兵器を輸出、憲法また死ぬ

十二月二十六日

つまづいて妻左手の指を折る手術が終わり丸い月出る

(入院)

十二月三十日

小晦日蹴って水面を鵜が走る

散歩する女朝日に手を合わす

老騎士が逃げる年追う^{たお}埒に霧

(新婚甥夫婦祝宴へ)

人に討たれ哀れ狸は歳越せず

悪魔の声

“追い払えガザ細片の異教徒を根絶やしにせよ墓も残すな”

十二月三十一日

雲中の朝陽尚日を新たにし
一条の光が照らす郷邑の空
内海に共に生きる人鳥魚
静夜に海蝶独居の夢

二〇二四年 正月
白江庵 謹製

『狂雲集』 「芭蕉を移す」

一休宗純

移得芭蕉価千金

有書無字断腸深

詩人窓外幾風味

白日青天夜雨吟

『正法眼蔵』 道元

芭蕉は地水火風空・心意識智慧を、根茎・枝葉・
華果・光色とせるゆゑに、秋風を帯して秋風に
やぶる。残る一塵なし。浄潔といひぬべし。

『碧巖録』

白日青天、眼を開いて瞌睡す

